

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3173号 2016.8.8 発行

障害者殺傷事件 「別の施設に移ってもらう検討も」

NHK ニュース 2016年8月6日



先月、相模原市の知的障害者施設で入所者が刃物で刺されて19人が死亡、27人が重軽傷を負った事件で、入所者の家族を対象にした説明会が開かれ、施設側は、現在も生活を続けている入所者に別の施設に移ってもらうことを検討しているとして、理解を求めました。

「津久井やまゆり園」では、6日午後2時から入所者の家族への説明会が

開かれ、およそ300人が出席しました。説明会は非公開でしたが、県や出席者によりますと、冒頭で施設を運営する「かながわ共同会」の米山勝彦理事長が、「事件から日がたてばたつほど、悲しみと残忍な行為に怒りが募ると同時に、発生を防げずに大変申し訳ありませんでした」と述べ、謝罪したということです。

そのうえで現在も施設で生活しているおよそ90人について、不便な生活を余儀なくされていることから、一部の入所者に別の施設に移ってもらうことを検討していると伝えました。今後、入所者の状況や家族の要望を考慮しながら、受け入れ先の調整を進めていくとして、理解を求めたということです。

入所者の家族からは、「入所者の平常を一刻も早く取り戻してほしいので、できることは協力する」といった意見のほか、「一日も早く元の施設に戻したい」という意見があったということです。一方で、「犯行を予告するような手紙を把握していたのに、なぜ防げなかったのか」や、「事件直後に的確な情報がほしかった」という声も上がったということです。

また、警察は、関係者への聞き取りを進めた結果、けが人は26人から27人になったとしています。

家族会 「再生に大事な一歩」

説明会のあと、「津久井やまゆり園」の入所者の家族会がコメントを出し、事件で元の居住スペースが使えなくなり園内の体育館や別の施設などで生活している入所者について、「それぞれの場所で慣れない生活を送っていて、園の一刻も早い再生を祈っています」としています。そのうえで「説明会では『利用者の平常を一刻も早く取り戻すためできることはなんでも協力する』という家族からの発言に大きな拍手が上がり、園の再生に向けて大事な一歩が踏み出せたと思います」とコメントしています。

献花台に花を手向ける家族も

説明会に出席した家族の多くは、車で「津久井やまゆり園」を訪れ、敷地の中で受け付けを済ませたあと、会場に向かっていました。中には、正門の前に設けられた献花台に花を手向けたあと、施設に入っていく家族の姿も見られました。一方、「津久井やまゆり園」の最寄りのJR相模湖駅には、説明会が始まる1時間ほど前から入所者の家族などが次々

と訪れ、施設側が用意したマイクロバスに足早に乗り込んでいました。

40代の娘が「津久井やまゆり園」に入所していて、6日の説明会に参加した70代の母親は、「事件をニュースで見たときは娘が被害に遭ったのではないかと思い、体に震えが来ましたが、幸いけがはなく顔を見たときはほっとしました。ただ、亡くなった方がどんなに痛かったかと思うと、かわいそうでたまりません」と話していました。また、容疑者については「身体の不自由な人ばかりを狙った犯行は残酷で、以前、施設の職員だったと聞いて許せないと思いました」と怒りをあらわにしていました。

入所している息子が大けがをした父親は、説明会のあと、「事件が起きてからこれまでの経緯について説明があったあと、施設を運営する理事長が『施設を元に戻していきたいので協力してほしい』と言っていました。入院している息子も“やまゆり園に戻りたい”と言っているの、早く入所者が帰れるようにしてほしいです」と話していました。

献花の人 今も全国から

「津久井やまゆり園」の前に設けられた献花台には、事件から10日余りが過ぎた6日も、障害がある人や福祉施設の関係者などが全国から訪れ、花を手向けて犠牲者を悼んでいました。

このうち、静岡県で障害者施設を運営する女性は「やまゆり園を応援するために、私たちの施設の利用者がメッセージを寄せ書きした色紙を持ってきました。この事件をきっかけに障害がある人たちはつらい思いをしています。命の尊さについて改めて考える必要があると思います」と話していました。また、車いすに乗って献花台を訪れた40代の男性は「被害者と同じように障害がある立場として、容疑者の差別的な発言は許すことができません。障害者を正しく理解してもらうための取り組みをしていきたいです」と話していました。また、富山県から訪れた60代の男性は「このような事件は二度と起きてはいけません。少しでも何かできないかと思い、花を手向けにきました」と話していました。

【相模原19人刺殺】「サトクンの犯行だ！」 事件を聞いた同級生は瞬時に確信した 捜査員も首をかしげる植松容疑者の根深い憎悪とは…

産経新聞 2016年8月6日

殺人容疑で逮捕された植松聖容疑者(右上) =同容疑者のフェイスブックより(一部画像を加工しています)



相模原市緑区の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件。過去の大量殺傷事件では不合理な動機から犯人が暴発する「被害者を問わない」ケースが目立つが、植松聖(さとし)容疑者(26)は半年以上前から障害者に危害を加える計画を公言し、遂行した。民族や人種、宗教などに一方的に憎しみを募らせ、危害を加えるヘイトクライム(憎悪犯罪)の一種だったともいえる今回の犯行。植松容疑者と親しかった知人らは「止められなかった」と自責する日々を過ごしている。

対象を激しく憎悪 過去の大量殺傷事件とは違う犯行動機

「重複障害者が生きていくのは不幸。不幸を減らすためやった」

逮捕後こう供述した植松容疑者。犯行は障害者をターゲットに絞って計画を練ったもので、施設職員には致命的な危害を加えなかった。

「攻撃対象以外には興味がない。対象を激しく憎んでいることが今回の事件の特徴だ」と捜査関係者は分析する。

この特徴は過去の大量殺傷事件と傾向を異にする。平成20年6月に東京・秋葉原の路上で、7人が無差別に殺害された事件。犯人の男はインターネット上の嫌がらせに怒り、仕事への不満も加わって閉塞(へいそく)感を募らせていたとされる。

同年3月には茨城県土浦市の駅で1人が死亡、7人が負傷する通り魔が発生。容疑者の男は自殺願望があり、「死刑になりたい」という目的を果たそうと、無差別に刃物で人を刺

したとされる。

世界で相次ぐヘイトクライム ネットが妄想加速？

13年6月、大阪府池田市の大阪教育大付属池田小学校で児童8人が刺殺された事件で、男は元妻とのトラブルなどから社会を逆恨みした結果、名門校を襲撃した。エリートを狙うという襲撃対象は明確だったが、「それでも今回ほどの根深い憎悪や計画性は見いだせない」（捜査関係者）。

海外では今年6月、米フロリダ州オーランドのクラブで性的マイノリティーを狙った襲撃事件があるなど、ヘイトクライムとみられる凶悪事件が相次いでいる。

新潟青陵大大学院の碓井真史教授（社会心理学）は、植松容疑者について「（勤務先だった）施設で目の当たりにした実際の障害者への印象など、さまざまな条件が複合的に重なり『自分の考えは正しい』と思い込んだのではないかと、犯行に至った経緯を分析。「インターネットにあふれた偏見や差別などが妄想を加速させたのかもしれない」とも指摘した。

犯行に反対する知人…「じゃあお前から殺してやる」

事件をめぐって植松容疑者は2月ごろから犯行を計画していた。こうした計画性の高さも従来の多数殺傷事件と色合いを異にする点だ。

植松容疑者は「障害者を安楽死させたい」などと話して施設を退職。2月には衆院議長宛ての手紙で「障害者総勢470人を殺すことができます」などと殺意を告白していた。友人にも同様の発言を繰り返しており、なぜこういう思いに至ったのかは未解明だ。

複数の知人によると、植松容疑者は2月17日、《聴いて下さい！！話は障害者の命のあり方です》から始まるメッセージを通話アプリ「LINE」で同級生らに一斉に送信していた。《彼らを生かすために莫大な費用がかかっています》などと自説を展開し、《ご意見をお聞かせ下さい》と結んでいた。

その後は同級生らに直接電話を掛けて犯行計画を打ち明け、「俺だって殺したくないけど、誰かがやらないといけない」「職員を結束バンドで縛るから取らないように見張ってくれ」などと独自の理論を展開し、犯行に勧誘したという。

同級生らはその都度、計画を取りやめるよう説得を試みたが、反論した友人に植松容疑者はこう言い放ったという。「じゃあ、お前を殺してからやる」。

ニュースを見た瞬間…「サトくんの犯行だ」

一部同級生は「ふざけるな」と言って植松容疑者を殴るなどしてまで中止を迫ったが、聞く耳を持たなかった。そのうち、実際に実行すると思わなかったこともあり、知人らは「あまり他の人に言うな」と反応するしかなくなったという。

知人の20代男性によると、植松容疑者は障害者施設「津久井やまゆり園」に勤め始めたころは「障害者は子供みたいでかわいい」と愛着すらみせていた。その後、「働いていくうちにだんだん変な発言が増えていった」という。

7月26日、事件のニュースが流れた際、同級生たちは瞬時に「サトクン（植松容疑者の愛称）の犯行だ」と確信したという。別の地元の同級生の男性（26）は「何をするかわからず、道ですれ違うのも怖かった」と告白。一方で「犯行を止めるため、ほかに何かできなかったか、と自問してしまう」とも話した。

障害者、偏見拡大を懸念 牛久で緊急集会 支援充実求める声 相模原殺傷

茨城新聞 2016年8月7日

相模原の障害者施設殺傷事件から10日余り。県内の障害者からは「私も殺されないだろうか」と不安の声が聞かれる。容疑者が障害者施設で働いていた点もショックが大きい。容疑者が精神保健福祉法に基づき措置入院していたことから、精神障害者の家族は偏見拡大を恐れるとともに、退院後の支援体制の充実を求める。6日、牛久市内で緊急集会が開かれ、障害者や支援者が苦しい胸の内を明かした。

集会を主催したのは、障害者の支援団体「つくば自立生活センターほにゃら」(つくば市)。事件後、障害者や家族の間で広がる動揺を抑えようと開いた。参加者は、犠牲者数と同じ19人分のキャンドルを並べ、黙とうをささげた後、思いを語った。

筋肉が萎縮する障害を持つ齊藤新吾さんは「街を歩くのが怖くなった。人への信頼を揺るがす事件」と指摘。別の障害を持つ男性は「理解者であるはずの職員経験者だったことがとても悲しい」と語った。

後見人が付くと選挙権を失う公選法規定を巡り、ダウン症の娘と違憲判決を勝ち取った牛久市の名児耶清吉さんは「差別をなくすことは難しいが、少しずつ障壁を壊していこう」と訴えた。

相模原の障害者施設殺傷事件を受けた緊急集会で話し合う障害者=牛久市内



一方、精神障害者や家族は偏見の拡大を懸念している。県精神保健福祉会連合会の古池源造会長は、2001年の大阪教育大付属池田小学校児童殺傷事件を起こした男が精神障害による入通院歴があったことを受け、「当時、精神障害者は怖いというイメージが強まった」と指摘。「精神疾患は誰もがかかる病気で、薬を飲めば安定していることを理解してほしい」と強調する。

その上で、今回の容疑者が措置入院を終えた後、病院や行政、家族が関わり持たなかったとして、「家族の意思が必要な医療保護入院や任意入院など、治療を続けることができなかったのか」と疑問を投げ掛け、退院後のフォローアップ体制の充実を求めた。

県障害福祉課によると、昨年度県内の措置入院件数は132件。県立こころの医療センターの妹尾栄一副院長は「絶対に事件を起こさせない仕組みをつくるのは難しいが、措置入院患者を退院後も見守ったり、援助したりする多職種のチームをつくっていくことは大切」と話し、関係者が一層連携した取り組みが必要と指摘する。(小池忠臣)

社会保障給付費 112兆円余で過去最高更新



当たりでは88万2100円となり、前の年度より1万2500円、率にして1.4%増えました。

分野別では、最も多い「年金」が54兆3429億円で前の年度より減少したものの、「医療」が36兆3357億円、介護などの「福祉その他」が21兆4234億円と、いずれも前の年度より増加しました。

一方、財源の内訳を見ますと、社会保険料が47.7%、国や自治体の公費負担が32.8%、年金積立金の運用などによる資産収入が15.9%などとなっています。

社会保障給付費は、毎年度、過去最高を更新しており、国立社会保障・人口問題研究所は「給付水準の抑制で年金分野の給付費は減ったものの、高齢化に伴う医療費や介護費の

NHK ニュース 2016年8月7日

平成26年度に年金や医療、介護などに支払われた社会保障給付費は、高齢化の進展などで、前の年度よりおよそ1兆4000億円増えて、112兆円余りとなり、過去最高を更新しました。

国立社会保障・人口問題研究所のまとめによりますと、平成26年度の社会保障給付費は112兆1020億円で、前の年度より1兆3970億円、率にして1.3%増え、過去最高を更新しました。国民1人

拡大で、給付費全体では伸び続けている」と分析しています。

【現場×記者】100円で食事提供「ところざわこども食堂」

産経新聞 2016年8月7日

■「孤食」の子供に温かい居場所を

親の事情などで「孤食」になりがちな子供に、無料や低料金で楽しく食事の機会を提供する「こども食堂」が、県内に新しくできたという。場所は所沢市。どのように運営され、どんな雰囲気です子供たちは迎えられているのだろうか。現場に足を運んでみた。(川上響)

「ところざわこども食堂」は、4月から所沢航空記念公園隣の「ドッグカフェdocca」(同市東新井町)で毎月第3火曜日の午後5時からオープンしている。料金は子供100円、大人300円。主催しているのは教育・コンサルティング業の一般社団法人サステイナブル・イニシアチブ推進協会(東京)だ。

取材したのは3回目の開催となった6月21日。午後5時ごろ、幼児や小学生が親に連れられて集まってきた。その子供たちを人なつっこい女の子と犬が迎え入れた。同店の伊藤宗矢オーナー(32)の長女、ひまりちゃん(3)と、同協会の島崎夕樹代表理事(50)の愛犬「だいき」だ。同店は犬と一緒に入れるカフェレストランで、子供も犬も思いっきりはしゃげるのが、この食堂の特徴だ。

「親に連れられて」と書いた通り、この時点でまだ本当の「孤食」の子供は来ていない。まず、こども食堂という「場」を作らなければ来ることができない。「今の参加者は知り合いが中心だが、まずは形作り。いずれは困っている子供たちにも気軽に来てもらえれば」と島崎さんは話す。

赤いランドセルを背負ってきた女兒は小学2年。食事前に店のテーブル席で漢字ドリルを始めた。それを見た同学年の子供らが「これ僕も習った」「なんて読むの」などと寄ってくる。

「食事の準備をするよ」。島崎さんが声をかけ、子供たちも配膳(はいぜん)を手伝う。調理を仕切る伊藤さんは「娘が生まれてから福祉に関心を持ち、恵まれない子供たちを助けたいと思うようになった」という。

この日のメインメニューは、ホワイトシチューとチキンライス。食材には伊藤さんの知人や地域の人々、困窮者に食品を提供する「フードバンクところざわ」から寄付された物も多く使われている。低コストで運営するこども食堂には、こうした寄付が欠かせない。

食後には「あっちむいてほい」「隠れるから見つけて」など子供たちが元気に遊び、午後8時頃に解散した。この日は子供9人と親6人が訪れ、スタッフ、ボランティアら10人がいた。

記者が見たのは子供たちの居場所作りの第1段階だ。「子供の6人に1人が貧困」とされる今、需要は強く感じた。「誰かがリーダーシップを取ってやってみることが大切だ」と島崎さんは言い、伊藤さんは「所沢で他の飲食店の方にも広がってほしい」と期待を語った。

栃木にこども食堂オープン 勉強と食事の場提供

下野新聞 2016年8月7日

【栃木】親の就労などで孤食になりがちな子どもたちに食事や学習の場を提供する市内初のこども食堂が6日、城内町2丁目の特別養護老人ホーム「蔵の街ひまわり」にオープンした。

食堂は、同ホームを運営する都賀町原宿の社会福祉法人「スイートホーム」を中心とした運営委員会が運営。食材の野菜はJA下野が提供するほか、調理は地元ボランティア、学習指導は市内在住の元教員や宇都宮大の学生が協力している。子どもたちは午前中いっぱい机に向かい、夏休みの宿題に没頭。待ちに待った昼食の時間では、カレーライスやカ

ポチャの煮物、ナスの煮浸しなど栄養満点のメニューを存分に味わった。

子ども食堂は、親の仕事の都合で孤食になったり、経済的な理由で満足に食事が取れなかったりしがちな子どもたちに食事を提供する場として県内でも浸透しつつある。

今回は27日に開催し、9月以降は第2土曜日に開く予定。参加費300円。

(問)蔵の街ひまわり0282・21・8807。

栃木県障害者スポーツの新拠点「わかくさアリーナ」開所 宇都宮



下野新聞 2016年8月7日

障害者の新たなスポーツの拠点となるとちぎ福祉プラザ障害者スポーツセンター「わかくさアリーナ」のオープン記念イベントが6日、宇都宮市若草1丁目の同センターで行われ、元五輪、パラリンピック選手らが、エキシビジョンゲームで花を添えた。

座った状態で行うシッティングバレーボールと車いすバスケットボールが披露された。シッティングバレーには北京、ロンドン両パラリンピックで入賞した金

田典子（かねだのりこ）さん（52）＝日光市木和田島＝やバレーボール元日本代表の大竹秀之（おおたけひでゆき）さん（49）らが参加。車いすバスケットにはロンドンパラリンピック代表の増淵倫巳（ますぶちともみ）さん（39）＝宇都宮市東横田町＝が「栃木レイカーズ」の一員として激しいプレーを披露した。

あなたは「終わった人」ですか？

NHK ニュース 2016年8月6日

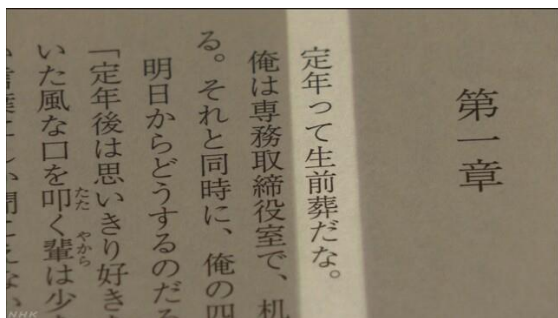
現役でバリバリ働いている皆さん、退職後の人生を考えたことはありますか？今、定年を迎える世代の人たちの間で、静かに読み継がれている小説があります。内館牧子さんの「終わった人」。定年退職後の男性が主人公のこの小説、出版から1年近くたった今も売れ続け、異例の10万部超えとなりました。「職場と墓場の間」を描いたこの小説が、なぜ反響を呼んでいるのか。まだ定年が実感できない30代半ばの記者が取材しました。（科学文化部・添徹太郎記者）

あがく姿をリアルに表現

小説「終わった人」の主人公は、大手銀行でエリートコースを歩み、子会社の役員として定年を迎えた、「終わった」男性です。40年以上に及ぶ会社勤めが終わったことが受け入れられない主人公は、目的のない日々を過ごしながら、現役時代のプライドと定年後の現実とのギャップに苦しみます。研究に深い興味がないのに出身大学である東京大学の大学院に入って虚栄心を満足させようとしたり、エリート人材を求める就職先を探してハローワークを訪ねたりと、居場所を求めてあがく姿が残酷なまでにリアルに描かれています。

「定年って、生前葬だな」「スーツが息しているみたい」

「俺はもっと仕事がしたい」「成仏していないのだ」



会社勤めの経験がある人にとって心に刺さる表現も、この小説の味わいどころです。

本は去年9月に出版されたあとロングセラーとなり、文学賞の受賞作やテレビや映画の原作でなければ到達するのが難しい10万部の大台に乗りました。

「私を取材したのかと思った」

部数だけでなく、読者からの反応の大きさも異例です。これまでに届いた「読者カード」

は400通以上。通常であれば10万部を超える本でも十数枚程度だということで、編集者も「こんなことは経験がありません」と驚いています。

「私を取材したのかと思った」「いまの自分の立場にぴったり」「身につまされた」・・・。

感想を寄せた読者は、ほとんどが50代から60代の、定年を間近に控えているか、定年を迎えた世代です。

「職場と墓場の間」をどう生きるか

著者の内館牧子さんは脚本家になる前、大手メーカーで会社員として14年間働き、社内報の編集に携わっていました。この小説を書くにあたって、かつてインタビューした、退職する人たちのことばを思い出したと言います。

「これからの人生、何をしたいですかと、定年を迎える人にインタビューすると、みんな第二の人生を楽しく趣味に生きるとか、孫と遊ぶとか、妻と温泉に行くとか言うんです。でも、自分がその年齢になってみると、あの人たちが本当にしたいのは仕事じゃなかったんだろうかと思うようになりました。ところが、世間はそういう人を必要としていないというのが現実なんです。平均寿命が延びてきて、私たちの世代は、職場を終えたあと死ぬ

までにたくさん時間がある。

つまり『職場と墓場の間』をどう生きるかが課題になっているんです」

退職後の厳しい「現実」

この小説が、なぜ支持されているのか。感想を書いた読者など「終わった人」に取材をしたところ、30代半ばの私には思いもよらなかった、定年後の生活が見えてきました。



まず、最も多かったのは、「毎日すること

がなく、一日を終えるのが苦痛だ」という感想でした。毎朝の習慣だった会社への通勤がなくなって自由になったにもかかわらず、逆に何をしてもいいというのがつらい、というのです。

また、「理由もなく焦りを感じる」という人も多くいました。何かすることを見つけなければ、と思うものの、実際にすべきことが分からなくなり、イライラや怒りを感じる人も多いようでした。

こうした感情が積み重なると、だんだん家族にあたるようになっていたり、ささいなことでも人と摩擦を起こしたりするようになってしまいます。その結果、家に引きこもってしまう人や、プライドが邪魔をして相談できないと話す人もいました。

こうした葛藤を抱くのは男性だけではないことも、取材で分かりました。退職した女性も同じように、虚脱感や焦燥感、いらだちを感じているのです。女性が男性と変わらない働き方をするようになった今は、男女に共通する悩みになっています。

「時間を使うのに四苦八苦」

こうした定年退職者の一人、鎌倉市に住む石神義範さん(69)を訪ね、ゆっくりと話を聞くことができました。

都市銀行に勤めていた石神さん。支店長や子会社の役員を務めるなど、充実した会社員人生を送り、去年の春、50年に及ぶサラリーマン生活を終えました。当初は、「妻と旅行に行ったり、神社仏閣巡りをしたい」と定年後の生活を楽しみにしていた石神さん。ところが、長年染み付いた習慣は、なかなか抜けませんでした。



「毎朝5時15分に起きて、6時5分のバスで会社へ行き、夜10時に帰ってくる。そ

ういう生活を続けてきたあと、ある日突然、まったく、朝自由で、やる事が何もない生活に移ってしまったわけです。何をやっていいのか、何に取り組んでいいのか分からなくなりました。目の前にある、あり余った時間を、効率的に自分のために使っていくために四苦八苦なんです」

小説で、主人公はもう一度、社会で活躍したいと再就職を目指しますが、相手先と釣り合わず、失敗します。石神さんも同じように再就職先を探しましたが、年齢の壁にぶつかりました。

石神さんは「年齢制限が書いていないので、応募できるものだと思って応募すると、落ちるんです。落ちた理由を電話して聞くと、ほとんどの会社が『実は年齢が』というんですね。仕事では誰にも負けないという自負がありますが、われわれ高齢者が働ける場所はこの社会にはないんです」と悔しそうに話していました。



思い出と戦っても勝てない

体調にも異変が現れました。耳鳴りや幻聴が続き、医師の診断を受けたところ、原因は「ストレス」ではないかと指摘されました。仕事をしていないことが、逆に精神的なストレスになっているのではないかというのです。

石神さんの変化は、家族にとっても苦痛でした。電気やテレビのスイッチを消し忘れるなど、小さなことで怒りを爆発させたかと思

うと、一日中ぼんやりとソファーに座っているなど、感情の起伏も激しくなりました。

石神さん自身に自覚はなかったと言いますが、妻の三重子さんは「ただただ嵐が過ぎ去るのを待つだけでした」と振り返ります。

小説の終盤、さまざまな挫折を経た主人公の男性は、1つのことばに心を救われます。「思い出と戦っても勝てねんだよ」。

石神さんも小説を読んだことで、過去の自分が今の自分を苦しめていたことに気がきました。目標の達成や、やりがいといった、会社員時代に大事だったことにこだわって生きていく必要はないのだと思ったことで、気が楽になったと言います。



内館さん「社会とつながろう」

内館さんは、定年後にもがき苦しむ多くの「終わった人」たちに、「終わったのは自分だけではない」ということに気付いてほしいと言います。

「仕事との別れは、遅かれ早かれ誰にでも訪れ、みな同じように悩みます。この小説は『どう終わるか』の本ではなく、終わったあとの人生を『どう生きるか』ということがテーマです。退職者のつらさというのは、社会から必要とされなくなったと思うつらさです。仕事一筋で生きてきた人は、どうしても仕事を通じて社会とつながろうとしますが、仕事以外でも社会とつながる方法はあ

